

## 第1回鳥取県幼児教育振興プログラム検討委員会協議概要

平成30年7月17日（火）

### 《乳幼児を取り巻く現状と課題について》

(座長)

- 「乳幼児を取り巻く現状と課題について」御意見をお願いしたい。

(委員)

- 改訂版のイメージ図からは行政の在り方についてどう考えるのかが見えない。行政の役割について考えたい。「鳥取県教育振興基本計画」も含めて「幼児教育振興プログラム」を考えていかなければならないと思う。
- 鳥取県の今の状況を考えたとき、鳥取の豊かな自然を生かした自然保育認証制度が生まれており、「森のようちえん」への入園等による移住が増えているが、私が気になっているのは、移住・定住後の永住という問題。移住した人が長らくこの地域に暮らし続けていくという課題について考えたい。ただでさえ鳥取県出身の子どもたちや若者たちの離県が多い中で、鳥取県での幼児教育に魅力がなくなってしまうと、この地域から離れる人がさらに出る可能性があるのではないか。教育の充実による鳥取で幸せに暮らしたという実体験を通して、自己肯定感を育んでいくことが求められていると考えている。
- このような視点から見た時に、鳥取の幼児教育が充実していくとどうなるのか、どのような枠組の中でどう位置付けていくのか、またそこに対して行政としての在り方をどう明記していくのかについて考えていただきたい。
- 関わっている子どもたちの立場からいうと、遊びきれない、遊びきる前に卒園してしまうことがあり、幼児教育振興プログラムの中へのそういった子どもたちの課題、特に医療的ケアの問題の位置付けについて少し疑問に感じている。その辺りも含めて子どもたちをどのように捉えているのか細かく教えていただきたい。

(座長)

- 指摘の資料については、保育所・地域社会・教育等が実態、期待等を加えながら、どうお示しするのかを考える必要がある。さらに子どもたちが、鳥取で過ごし、鳥取で暮らしていく中で、鳥取への思いを強めていけるようにすることが課題である。もう一つは医療的ケアを要する子どもに対する配慮をさらに検討してもらいたいということだった。

(事務局)

- 指摘の資料は、平成24年度に作成したものであり、改善していく。鳥取で学んだことによって自分や鳥取県を好きになってほしいという思いを込めてプログラムを作りたい。
- それから2点目の医療的ケアに関する内容についても、幼稚園教育要領等の中にも記載されているものであり、特別支援教育課と連携を取りながら盛り込みたいと考えている。

(座長)

○プログラム改訂の基本的な考え方として、24年度版を引き継ぐ形で、近年の県内の動向等を踏まえて内容に盛り込むということだった。例えば、新幼稚園教育要領等の内容、検討委員からの御意見等を加え、よりよいプログラムとすることになる。

(委員)

○いただいた資料に小1プロブレムの未然防止といった内容があり、そのアンケート結果として、保護者と子どもたちの中に愛着形成に課題があり、小学校入学時にうまくスタートできないことが要因としてあるのではないかと記載されていた。私はPTA協議会の事務局をしていた関係で、小学校の保護者の集まりに参加することがあった。この愛着形成が非常に大きな課題としてあると私も思う。しかし、この課題の中には保護者自身の自己肯定感の形成が非常に難しくなっていることも含まれている。そのため、幼児教育に関わる人たちの負担が非常に大きくなっている。また幼児教育に関わる人たちだけではなく、いろいろな人たちが関わりながら、その保護者と子どもを育てていくことが必要になってきていると痛切に感じている。

○小学校等では、私が関わっているファシリテータ派遣などのいろいろなものを活用しながら保護者の仲間づくりを積極的に行っている。研修というと子育ての仕方やアドバイスが多いが、やはり保護者がお互いに共感をしながら、「これやってみようかな」と思えるような研修をどんどん増やしたい。

○森のようちえんの子どもたちが小学校に入学した時に、スムーズに学校に行けているのか心配している。私が子育てをしているときに自由保育が非常にもてはやされて、子どもたちが時間を超えて遊びきった結果、入学後しばらくの間おとなしく椅子に座ることができないなど学校現場で問題とされ、また設定保育に戻ったというのを記憶している。「遊びきる」という保育がどのように行われているのか知りたい。5歳児の時から、スムーズな就学に向かいながら、なおかつ「遊びきる」ことも保障されているのか、私は資料を見た段階ではどうなのか疑問に思っている。

(座長)

○子どもの愛着形成に大きな課題がある。また、保護者自身にも大きな課題があるという指摘であった。保護者への支援が必要であり、保護者同士の仲間づくりに取り組んでいくことが必要ではないかということだが、このことについては、プログラムの「家庭教育の充実」のあたりで話していきたい。

○森のようちえんに関する情報として、以前自由保育がされたけれどうまくいってなかったので設定保育に戻ったのではないかと、自由保育で遊びきるということでのよいのかということだが、それは必ずしも自由保育、設定保育という問題ではないと私は認識しているが、事務局の方からお願いしたい。

(事務局)

○自由保育がはやった時で、子どもがやりたいことをやりたい時にやりたいようにやらせるという形の自由というものを大事にされた時代があったのだと思う。

(委員)

○それはそういう意味ではなくなってきたのは認識している。しかし、5歳ごろからは、小学校で、必要となる時間の概念が遊びきることの中で育つのか。時間設定をしながら「遊びきる」ということでよいのか。

(事務局)

○5歳になると時計の絵、長短針、実物等を意識させながら、遊びは何分まで、何分からは片付けという時間を意識した取組が行われている。また、5歳だけでなく年齢に応じた時間を意識した取組も行われている。しっかりとねらいを持って「遊びきる子ども」を育む教育・保育を行っている園が全てだと思いたい。

(座長)

○森のようちえんについて情報をお願いしたい。

(事務局)

○森のようちえんの園児が小学校での生活に適合していないということは聞いていない。義務教育以外の施設に卒園後に通って、義務教育に戻すところに少し課題が出てきているということは聞いているが、外での活動が多く、子どもの自主性を最大限尊重するという他の認可園とは少し違った視点を持ってはいるが、基本的には保育所保育指針にもとづいて運営をしていただくようにしている。その視点で施設の監査も実施している状況であり、大きな問題はないという状況と把握している。

(座長)

○森のようちえんについては、ずいぶん前のことだが、小学校では意欲的に生活しているという情報もあった。現実にはそんなに大きな問題はないようである。

(委員)

○先ほど移住・定住・永住という話があったのだが、例えば、日野町の場合、延長・土曜日保育などの保護者のニーズに保育所がどこまで対応できるかという悩みがある。その背景としては、保育士の確保の問題。近く幼児教育無償化になり、入所希望のすべての子どもが入れるかと言ったら、保育士の人数、あるいは施設の大きさなどによってお断りをしないといけない状態である。すると待機児童が増えるということが起こる。来年度に向けての保育士の募集もかけたが、なかなか採用に結びつかない。保育士の確保が課題だと思っている。保育士を確保できなければ、保護者への支援も子どもたちへの保育も十分にできない。提供できない。

○今いる保育士には、研修等を積んでもらいよりよい保育を提供してもらおうということが、近々の課題だと感じている。

(座長)

○今いただいた意見に保育士不足、これを検討課題に入れてよいか。

(事務局)

- 保育所はもちろんだが、小学校・中学校・高校についても大きな課題だと思っている。その背景には学校現場の多忙化や、全国的には経済状況が上向いて就職口がたくさんあって、すぐにも合格することなど、様々な理由がある。しかし、鳥取県の子どもたちを鳥取県でしっかり育むというよさやすばらしさを、保育士や教員を志望する生徒・学生のどのように伝えていくのかが、大きな課題だと考えている。
- 保育士養成については鳥取短期大学でお世話になっている。学生たちの一部は処遇待遇的なことで志望変更を行っていると聞いている。また、県外にもたくさん出ている。そういう学生をいかに鳥取に戻すかということも重要なこと。人材を確保するということところにも、今後継続して努力してまいりたい。

(座長)

- ちなみに、県内はあと一つ鳥取大学でも養成している。

## 《乳幼児を取り巻く現状と課題について》

(座長)

- めざす子どもの姿「遊びきる子ども」について、先ほどから浅雄委員さんの方から出た意見と重なるが、引き続き意見をお願いしたい。

(委員)

- プログラムが90%以上の園で使われているということで、非常にすばらしいと思うが、具体的にどう使っているということは書いていない。

(座長) 事務局に説明をお願いします。

(事務局)

- 具体的にそれぞれの園でどう使われているかということについてはきっちり把握しているわけではないが、園ですべきことの確認や園内研修で研究のテーマ等に合わせて使っているという話も伺っている。実際使っている園の先生方にどのように使っているのかお話しいただきたい。

(委員)

- プログラム改訂の平成24年度から今年度にかけて、乳幼児を取り巻く環境は大きく変わっている。0・1・2歳児の保育を行う小規模事業所という前はなかった保育施設ができ、入所率も高い。今回改訂でも、小規模事業所等が対象に入れてあることはとてもありがたい。
- 保育を行う際、まず一番に大事にすることは、目の前にいる子どもの姿を捉えるというのが一番だと思う。2番目に保育者の援助や配慮、そして環境構成について考えること。そういった子どもが遊びたいと思えるような環境の構成を工夫する際に、このプログラムや他の冊子を参考にしている。

- これまで現場では「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」を読んで、園なりに内容を捉えて実践していたが、プログラムやカリキュラム等の冊子は、現場の実践を入れたものになっており、とても参考となっている。
- 子どもを取り巻く鳥取市の状況を調べると、たしかに入所児童は増えている。また、園への入所が増えているのに子育て支援センターの利用者も増えている。このことは、先ほどの保護者のつながりたいという気持ちや育児不安のあらわれだと思う。
- 地域の中にある支援センターに行く人もあるが子どもの出生率が少なくなって利用者は減っている。一方、町の中であり、交通の便がよく、車が停められることにより、地域外の保護者の利用が増えている支援センターもある。このように、入園・入所前の保護者さんはどこかにつながりたい、子育てについて相談したいという思いが強いのだと思った。

(委員)

- プログラムを活用した実践例をまとめた取組事例集が非常に活用しやすい。子どもの見取り、保育計画の作成・実践、保育の振り返りということをこの事例集をめくりながら考えることができる。現場の先生方は自分の実践プラスこの冊子で振り返り、また新たな自らの保育の創造ということに繋げていける。このように現場では活用させていただいていることはたくさんあると認識している。

(委員)

- 取組事例集の事例が活用しやすく、自園でも自分たちの実践を反省する材料にしている。保育のねらいや評価、写真を活用した記録の書き方等の参考にしている。

(座長)

- 前回の平成24年度版が出たあと、鳥取大学でプログラムの周知・活用のためのシンポジウムを実施し、県下全域から100名ほど集まったということがあった。前回のプログラム改訂で現場の関心は相当高まり、意欲は強まったと思っている。

(委員)

- 保育園・幼稚園・こども園で人や物、場所といった環境を通してしっかり遊びこんできた子どもは、小学校に入ってから工夫して学ぶことができる。「遊びきる」ことを通して自信をつけてきた子どもは、学びの中でも「こんなことしよう」「これはどうだろう」という小学校の教員の問いかけに対してもすぐ反応できる。逆に、自信を付けてこなかったという場合、これは私の例だが、「絵をかきましよう。」という声に「ぼく下手だからいやだ。」と言うなど、はじめからチャレンジしないこともあった。
- 昨年度の全国学力・学習状況調査でも、「自分には、よいところがあると思いますか」という項目において「当てはまる」と答えた子どもは4割程度ということがある。そこで、子どもの考えを受け止めながら体験を通して、見て、触れて、感じて、学ぶということを大切にしているところ。自分にはよいところがあるというような自尊感情、遊びきって付けた自信を身に付けることができれば、小学校での学びに対する向上心につながっていくのではないかと思う。だから、園、家庭において「遊びきる」「自尊感情を育てる」ということを大切にしてもらいたいと機会をとらえて伝えている。

(座長)

○ただいまの指摘は幼児の段階で遊びきることを大事にすることが小学校以降の学びにつながるということだと思う。そして、小学校教育の中でも工夫して幼児期の教育の在り方を積極的に実行しておられる。

(委員)

- 子どもの自己肯定感を育てることは園だけでは難しく保護者と一緒に育てることが大事だと思う。親の状況によっては、子どもが自分でできるというものが育ちにくい環境がある。園では一生懸命「よくがんばったね。」「これができるようになったね。」と一つ一つ丁寧に対応されているのだと思うが、その姿を保護者へ「こんな声掛けがよいですよ。」「こんなふうにしてみてください。」と提供し、共有してほしい。
- 保護者は、勉強しながら親になっていく。そういうところを専門家がサポートしながら、「このやり方がよいですよ。」「こうやってみてください。」とどンドンアプローチしていくことも必要だと思う。
- 私は岡山の出身であり、岡山で子育てをした。その時は、地域に親子クラブのようなものがあって愛育委員の他に保育士・保健師さんが各校区一人配置されていた。そこで保護者が自分たちで親子クラブの自主運営をする。幼稚園に入園するまでに自分たちで会長・副会長や1年間の事業内容を全部決めて予算をもらいに行くなど地域で子どもを育てるという取組があった。しかし、鳥取には、支援センターはたくさんあるが自主運営がほぼなく、イベントの広報が出ると「楽しみ」「行ってみよう」と大勢が出かけるとのこと。中には、自主運営に切り替えようとしたが、結局、行政が全部やってやっている例もある。そういう意味では岡山は保護者が自分たちでつながりを作り、自主運営をしながら幼稚園に上がっていくので幼稚園に上がった段階ではすでにつながりができていた。そこで、支援センターのサポートは厚いけれど、在り方についても考えていきたい。

(座長)

○保護者自身が育たなければ、保育・幼児教育側がいくら頑張っても難しい。保護者の声をいただきたい。

(委員)

- 私のところも共働きで、親も近い所にいないので預かり保育でお世話になっている。
- 両親が共働き、祖父母と同居等、いろんな方がいるので一概には言えないが、保護者としては園に方針を伺った上で預けているので、基本的に全幅の信頼を置いている。園での怪我等の細かい情報も教えてもらえれば安心はさらに大きい。しかし、「今日誰と遊んだの。」と聞いても「わからない。」と返ってくると不安になることはある。
- 実際に私はPTAの副会長をしているので、他の家庭より園と絡む回数は多く、先生たちにも聞きやすい。もっとオープンに園と保護者が関わられるように工夫されたよい取組があれば、保護者も子どもと一緒に成長できると思う。

(座長)

○保護者が保育の活動に関わっていくことについてはどうか。「遊びきる」という言葉でも現実には保

護者の中にはそれが何を意味するのか分からないということもあるかと思う。教育関係者、保育関係者はそれこそが大事ということがあるが、その理解がないとなかなか子どもが育ちにくいということもあるかと思う。もし差支えがなければお話を聞かせていただきたい。

(委員)

- 鳥取幼稚園5園すべてに「親児おやこの会」ができ、合同でのイベントも開催している。親と子ども（児）と一緒に遊ぼうという趣旨で活動している。例えば、つかみ取りをしたヤマメを塩焼きにして食べ、子どもたちがみんな一緒に遊んで片付けをするというもの。そういう親と子ども一緒に遊びを園公認で行う。普段仕事で遊べない親もおり、一緒に遊ぶよい機会となっている。
- 「遊びきる」については私の中ではとてもよいことだと思っている。何もわからない小さい子どもは、遊びからよいことや悪いこと、ありがとう・ごめんなさいの気持ちや言葉などを徐々に覚えていくのだと思う。物を大切に扱うことも遊びを通して学ぶ。
- そこから、小学校に入った時の切り替えをどうするのが大切だと思う。幼稚園で遊びたいだけ遊ぶ、それが小学校になったら勉強が入ってくる。宿題もある。宿題をしないといけないけれど遊びたい。でもできない。いろいろな手伝いごとでもでてくる。朝が早いから早く寝ないといけない。いろいろな制約がある中で、子どもの中で全部できるかといえばできないこともある。その時間の組み方等をどう教えていくのか難しい。

(座長)

- 改訂の基本的な考えとして新幼稚園教育要領等・小学校学習指導要領の改訂を踏まえて、幼保小の連携、幼児教育と小学校教育との接続についてもさらにプログラムに生かしていく。

(事務局)

- 事務局、設置者、園、小学校それぞれが別々に振興していても、空回りとなる。連携して保護者や子どもの立場に立ったプログラムになるように、検討していかなければいけないと思ったところ。そういった意味も含めて、保護者の立場でどういう課題を感じられているのか、こういうことが大事だと考える等の御意見があれば、ぜひ聞かせていただきたい。また、連携のある他園の方々の御意見等をぜひ教えていただきたい。
- 本日、配付の「改訂に関するアンケート」には、それぞれの立場でいろいろな意見が出ている。市町村の指導者研修会及び幼児教育・保育施設におけるミドルリーダー研修会に参加された方々が、子どもの姿、保護者の姿あるいは保育者の姿、地域の姿に「こんな課題がある」と書いている。非常にそれぞれの立場で感じることもあるのだと思う。
- 次回までに少し時間があり、そういった点も含めて、意見を持ってきていただけたらありがたい。我々は行政サイドではあるが、かつては保護者やPTAの一員だった。行政からの一方通行にならないように、小学校教育の前の幼児教育の重要性を発信するとともに取組を推進していきたい。